

【研究ノート】

## 幼児の表現活動と幼児理解についての一考察 ～領域「表現」の視点から～

星 山 克 己・安 元 雅 子

Expression Activity and Infant Understanding in Preschool Children  
～The Region from the Point of "Expression"～  
SHIYAMA Katsumi, YASUMOTO Masako

In the area of "expression" shown in the kindergarten teaching guidelines, we consider the expression activities that children perform in their day-to-day school life, and how to plan preschool understanding and develop what kind of child care is.

Children's expressions change greatly in the environment surrounding them. Therefore, in this research, we conduct a case study of the practice of music, mainly on rhythms adopted in early childhood education in Japan, and an education concerning other expressions. For example from the expression of children changes. We consider how to understand the expression from the viewpoint of infant understanding.

In addition, we consider the relevance to the contents shown in the kindergarten teaching method. In particular, the three pillars of "quality and ability" indicated in this kindergarten instruction plan.

Finally, what kind of educational content and activities are needed to cultivate the ability to express oneself and the ability to communicate with other people. These are important in establishing the foundation of the next generation who will lead the era from here on. In conclusion I will consider whether (experience) is effective in this endeavor.

Key Word the area of "expression", infant understanding, earlythmics

キーワード：領域「表現」、幼児理解、リズムック

### 1. はじめに

人間は生活する中で、絶えず何かを表現、表現しながら行動している。それは乳幼児も同様で、日々の園生活の中で、様々な表現の機会と覚悟を繰り返しながら、人としての成長を遂げていく。その表現をどのように捉え、受け止めていくか、それに対してどのようなフィードバックを行い、どのような環境を子どもたちに提供して行くかによって子どもたちの成長も大き

く変わる。

日本の教育制度においては、小学校以上の教育課程では教科教育の中で教育活動が行われるが、幼児教育においては「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」と幼稚園教育要綱において記述され、日々の教育活動が展開されている。平成 30 年度から施行されている幼稚園教育要綱においては、

新たに幼児理解教育において育みたい態度・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が望まれる。このことは、子どもたちの成長していく力の基幹となる「資質・能力」を幼児教育の中で育みたいことがその教育目標であり、これらの資質や能力を育む領域の観点から子どもの活動を通して、育むことが幼児教育における幼児理解教育であることを示している。

一方、日本の幼児理解教育は多くの私立幼稚園が今までその多くを担って来て、現在に至っている。私立幼稚園は、それぞれ園の教育理念に基づき、教育方針・計画・内容等を考え、日々の保育を実践している。その中で幼児理解教育実践に示されていることがどのように取り入れられて日々の保育が行われているかを検証することは、幼児理解の質を向上させるためには不可欠な要素であると考えられる。

## Ⅱ. 幼児理解の領域と園児

幼児理解教育実践に示される領域「表現」において、子どもたちが日々の園生活において行う表現活動を考察する。その中からどのように幼児理解を図り、どのような保育を展開していくかを考えることは必須の要素である。子どもたちの表現は子どもたちを取り巻く環境で大きく変わる。そこで、本研究では、我が国の幼児理解教育において多く取り入れられているリトミックを主とした音楽教育および、それ以外の表現に関する教育実践の事例研究を行い、子どもの表現がどのように変化していくのか、その表現をどのように理解するかという幼児理解の観点からの考察を行う。そして、幼児理解教育実践に示された内容との関連性について考察する。特に、今日の幼児理解教育実践に示された「資質・能力」の3つの側面豊かな活動を通じて、感じ取り、気付いたり、わかったり、できるようになったりする「知識及び技能の基幹」、気付きたいことや、できるようになったことをを告げたり、考えたり、工夫したり、表現したりする「思考力・判断力・表現力等の基幹」、好奇心、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」と実践に行われている保育内容との整合性を検証・分析する。その

中でこれらの実践を創う子どもたちの人間形成の基幹をつくるうえで重要な「自らを表現する力」や「他者とのコミュニケーション力」を育むには、どのような保育内容や活動経験（経験）が効果的であるのかを考察する。

先行研究として、中村弘孝（2018）は、リトミックを保育現場で行う意図について領域「表現」の内容と照らし合わせ、また幼児理解教育実践に示された幼児理解教育において育みたい態度・能力の3つに加え、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とリトミックを通した音楽表現活動との関連性を明らかにしている。また、リトミック以外の音楽活動も保育現場ではたくさん行われるべきと指摘している。

幼児期の子どもたちは一人ひとり違って他まれた資質があり、成長期や育ちの環境により個性、性格が随々である。そのような子どもたちが家庭から幼稚園という大きな社会に入り、生活や遊びを通して随々なことを学ぶわけであるが、その中で他者（友だち）との関わり方一つは重要な学びとなっている。家庭は一度安心して過ごせる場所であり、また安心して自分を十分に表現できる場所であるが、特に人間関係の幼稚園では、そういうわけにはいかない子どもも多く見られる。幼稚園という他人与人の関係性の中で、不安や緊張感など子どもの気持ちもは複雑であるように察することができる。

しかし、園生活を過ごす中で、先生との信頼関係を築きめし、友だちとの関わりの中で自分の合う友だちを見つけ、楽しい遊びの中で自分を表現できるようになっていくようになる。自分を表現できるようになるということは、耳から聞いても話さ話さとしていなくても、耳から見ても話さ話さとしていなくても、自分と人間は、関わり合いのあることに対しては、自分や時間を費やす一生懸命に取り組む。互いに理解のないことに困っては、できるだけ聞かれないように避けて通るようになるものである。幼児期でいろいろなことに興味を持たせ「面白い」「うめしい」といったポジティブな感情をたくさん体験させ、胸を上手に開放してあげることが重要である。その結果子どもたちは遊びの中でたぐ

ほんのこを吸収し、それが「考える力」(思考力)に発展し、やがて「自分で工夫して行動する」(表現)につながっていくのであると考える。

### Ⅲ. 幼児の発達とリトミック

リトミックとは、正しく歴史初期に、スイス・ジュネーブの作曲家で音楽教育家でもあったエミール・ジャック・ドボルグ博士(1865-1958)によって創案された音楽教育法で、児童心理学・生理学の観点から、大切な幼児期を人格形成教育として知られている。リトミックは決められた動きをするのではなく、音楽を聴いてそれに反応して動きを判断し、表現する。すなわち音楽というツールを使い、「感じ取り→考え→表現する」という心と身体のパランスの取れた教育法である。幼児期の成長は子どもの発達の可能性を遂に表れる期間でもあり、その可能性の高さとなるものをきく経験でできこそ、次達した幼児期であったということが言えよう。すぐに結果は見えるものではないが、成長過程において何らかの刺激を及ぼし、よりよい成長へとつながることを期待し、日々繰り返す行うことが重要であると考ええる。

そこで、日常のリトミック活動が子どもたちの成長にどのような効果をもたらしているのか、またどのように人間形成の基盤となるものを培っていくのかを教育実践事例から考察する。

### Ⅳ. 教育実践事例

幼児期の育ちを探究すると、3歳児は「どりして」「なんで」という言葉がなくなる時期であり、固の成長も根拠から創造期へと移っていく。4歳児は根拠を通して得たパターンを組み合わせて、オリジナルの型考をする創造期へと移っていく。そして、5歳児は友だちなどの関係を把握し、いろいろなことを協力してできるようになり、心のコントロールもできるようになる。そのような育ちをする子どもたちが日々のリトミックの活動においてどのような表現を行っているか、そこから

どのように子どもたちの理解できるかについて、各幼児園の実践事例から考察する。

#### 1. 園における毎朝のルーティン活動

##### (1) 朝礼

朝の会で「国語いりぼん」(アメリカ民謡)の音楽を聴かせ全体(各クラス)に一時に脱走で通す。この音楽を聴くと、子どもたちは多少の緊張感を持ち、遊びの時間から朝の会への準備と準備もの切り替えを行う。姿勢を正し(踵を合し)、部屋に合わせて行う子どもたちの基本の動きは次の通りである。

##### ＜幼児の活動内容＞

##### 4分の4拍子の曲に合わせて

- ① 拍目 胸の前で手をたたく
- ② 拍目 胸の前で手をたたく
- ③④ 拍目 両手を前に伸ばす

以上の動きを繰り返す。

この動きが3歳～5歳までの年間、毎朝のルーティンで実施しているが、そこで見られる子どもたちの年齢別の次の下記の通りである。

##### ＜3歳児＞

- ・音楽と先生の言葉と動きの指示で活動する
- ・音楽のフレーズ(曲の型)ごとに3拍目の手の動きを先生の指示する場所へ促していく
- ・先生の言葉を聞いて動くことができる
- ・先生の言葉だけで自分からリズムを見て動くことができる
- ・先生の次の言葉が何かわくわくしながら活動をもつて動くことができる

##### ＜4歳児～5歳児＞

- ・3歳児の経験から先生の代わりに自分もみんなの前に出てみんなに動きを述していく。
- ・曲のフレーズ(曲の型)の中で次の動きを考える(約15秒間)ことはできず、指示が制するときに動く
- ・4歳児のフレーズ型がわかるようになり先生の次の指示を考えて言えるようになる
- ・お言葉を聞きながら待つようになる

##### ＜2) 歌謡＞

##### ＜幼児の活動内容＞

- ・「きれいな声で歌のごあいさつをいたしなましう」の言葉を合図に「おはようのうた」を歌う

### ①振り仮名

- ・年齢相応の発声練習を行う
- ・手拍子歌を歌う

以上の表現活動を3歳～5歳までの3年間、毎朝のルーティンで行った結果、そこで見られる子どもたちの年齢別の歌は下記の通りである。

#### ＜3歳児＞

- ・ピアノのテンポを返ると、歌謡（メロディー）やリズムがわかりやすいようにすると歌う
- ・詞章がまだはつきりと出ていない子どもがいるが、生活の歌を毎日歌うことや手拍子の歌の中の歌詞を通して語彙を増やしている
- ・発声練習により、言葉を発する時、歌う時に口を開かすことを意識するようになる

#### ＜4歳児＞

- ・歌詞の内容が理解できるようになり、自然に對しての関心を抱き興味が湧いて来ようとする
- ・発声練習では、口の形、舌の位置やリズムを意識して歌うが発音が十分には出ていないためデュエンスが付きにくい。

#### ＜5歳児＞

- ・「おはようのうた」は、日常生活の子どもが前に出て、歌う曲の動物や楽器などを認識し、全詞が覚えられているかを確認する
- ・発声練習では、口の形、音程やリズム、音値、強弱やスタッカートやレガートなどを認識して歌う
- ・手拍子の歌の曲にも、ストーリー（物語）が見える歌詞に感情移入することができるようになり、具々歌曲を歌えようというようになる

### ② 創声練習

#### ＜幼児の活動内容＞

教師の声掛けのリズム・メロディーを模倣して子どもたちが応答する。具体的には図1～2のように

図1

図2

毎朝の創声練習では、一人ひとりの名前を呼びアイコンタクトをとり子どもの表情はもちろんであるが、意図であったり、返事の声の大きさなどで発達状態を調べる時間でもある。この歌唱を3歳～5歳までの3年間、毎朝のルーティンで行った結果、そこで見られる子どもたちの年齢別の歌は下記の通りである。

#### ＜3歳児＞

- ・名前を呼ばれて手をあげることはできるが、「はい」という返事ができない子どもがいる
- ・「元氣に返事をしましょう」という先生の言葉に對して、大声で叫んだり声の出し方が困難である
- ・返事ができるようになったら、2拍子のリズムで名前を呼び、2拍子のリズムで「はい」と返事をする

#### ＜4歳児＞

- ・名前を呼ばれて手をあげ「はい」と返事ができるようになる
- ・2拍子に加え、3拍音程でも名前を呼び、3拍音程で返事をしたりする
- ・声の大きさや手のたたき方（動きの大きさ）を意図して返事をする

図3

- ・名前を呼びめ、声を天井にあげる意識をもって「はい」と返事ができるようになる
- ・いろいろなリズムパターンで名前を呼び、そのリズムで返事を返すようになる
- ・リズムを他のいろいろな楽器で表現し、それを聞いて見て聴感しながら返事をできるようにする
- ・クラス全員が参加することで一定のテンポでクラス全員の名前を呼んでいく

このように、園生活で毎日行う活動において、年間制ののびのびや活動の展開をしていくことで、音楽的要素を十分に取り入れていくことができるのである。

## 2. 園の教育行事で使えるリトミック的価値

### (1) 運動会

#### ・体操

自由「曲」の呼吸、音楽を感じながら四肢を十分に動かす行うことができるようになる。

#### ・運動

運動も振り付けの中に、カノンを入れることも多くあり、子どもたちはとても好み、4歳から5歳まで十分に楽しみながら音楽表現ができる。

- ・マーチング（鼓隊・タパーガード隊）入鼓を叩きながらの歩行や、フラッグを動かしながらの歩行により、複数のリズムを同時に感じ取ることができる。

#### ・園生活活動（園びや・園祭）

テンポの速い「子どもたちが心地よく感じるテンポ」の曲をリズム図として渡しながら、日頃の練習を行うことによって、自分の身体の動きを自分なりに音楽と合わせてリズムを感じ、調子感を感じることができるようになる。本番でも練習時と同じ曲を演奏中の指揮者として返すことで、それをより容易とすることができる。

### (2) 卒園会

#### ・劇

劇を演じる中で、子どもたちは役割を曲まで表現する。

#### ＜演劇例 劇作劇「タイムマシーン」＞

登場：大きなイメージを各曲の曲まで表現

同じ調子：無重力空間の地に足が着かないような表現

ロボット：足こもなし曲く表現

宇宙人：やわらかな動きで表現

これらの劇の展開における表現は、想像力を膨らませその後に自分になりきることで表現を豊かにすることが出来るものである。劇を演じる喜びを感じ、その役割の気持ちまでも自分のものにすることで十分な表現、子どもが満足できる表現ができるのである。

#### ・合奏

3歳児ではピアノのキーボードで奏でられる音程に合わせて、鼓・カスダン・タ・タン・バ・ン・ト・タイ・アン・グル・小太鼓・大太鼓を使ったリズム奏を行う。それぞれの打楽器の特性を活かしたリズムパターンを演奏する中で、リズムの違いを感じ取り、皆で一音に演奏する楽しさを味わう。4歳児・5歳児では鍵盤ハーモニカ、打楽器、ピアノ、キーボード（グランド・ピアノ・デジタル・ピアノ・バス）の編成で、年間制の練習曲に合わせてアレンジをしたオリジナルの合奏曲を演奏する。合のハーモニーや打楽器の持つ特徴ある音色などを耳で聞きながら演奏することにより、複数のリズムを同時に感じ、一音に楽器を演奏する楽しさを感じることが出来る。また、ニュアンスをつけての演奏することにより、曲に感情が伝わることを学ぶと共に、みんなと調和する楽しさから協調性も育める。

#### ・音楽表現

年長児が進行や後退を行う場面がある。その際、他に3人で同時に音楽に合わせて音楽を言うという場面でも拍子を感じ取らなければみんなの息を合わせることはできない。

#### ＜演劇例 大兄と小兄のふたりで演劇する＞

大兄が「はい。」と号令をかけた後、小拍子に合わせてあいさつを行う。」

1・2拍 A・大兄が調を下げる

3拍 A兄が「なおい」と号令をかける

4拍 A・小兄 調を上げる

1拍 A・小兄「おはようございます」と息を合わせてあいさつ

その後は交替で音楽を述べ、音楽が終わった

る幼児は「おい」と声をあげた後、

- 1～2歳 人間-幼児が手を下げる
- 3歳 幼児「なおい」と声をあげる
- 4歳 エ・音楽手を上げる。

この一連の動作は、2人がテンポを合わせて4拍子を中心することで拍を認識し、身体と動きを協調しながら合わせるという、リズムを学ぶ中で少し進歩を思考と画きができるようになる。

### 3. リトミックレッスンの時間から

施設園のリトミックは、リズム・拍子・旋律・動きを基本とし、年齢に応じた活動内容で行っている。リトミックの時間には、音楽というテーマを使って子ども同士がゆかに刺激しあい、考えながら自らを表現できるかというのをねらいとして、子どもたちが楽しく感じられるように配慮して実施している。また、下記に示した各音楽的要素のねらいには種々を合併（領域）が組み合っているため、リトミックを単なる音楽教育と捉えるのではなく、総合的な人間教育へとつながる活動であると考ええる。

#### 〈1〉リズムのねらい

- 生活の中の言葉を意図し、その言葉のリズムを打つことができる
- リズムを聴いて合わせて打つことができる
- 音程の高低を感じ取る
- 音調（音の長さ）を視覚や触覚で感じる
- 音程のリズムを体験する
- リズムをいろいろを速さや強さで打つことができる
- リズムパターンを打つことができる
- 音程の複数のリズムを同時に経験する
- リズムをモノで打つことができる

#### 〈活動例〉

- 音調にリズムをつけて歌謡
- 手拍子でリズムパターンを模倣
- 積み木を使って高さ、強度からの理解
- 運動の形なリズムの理解

- a. 先生がベースを打ち、子どもがリズムを打つ
- b. 右手と左手で別のリズムを打つ
- c. 足（ステップ）と手（タップ）を別の

リズムで動かす

- d. 相手にステップや両手2人組で相手の自分のステップをリズムに合わせる

#### 〈2〉拍子のねらい

- 言葉とその拍を一致させることができる
- 2、3、拍を数え直し数えることができる
- 2拍子を経験する
- 手合わせをしながら拍子感を養う
- スウィングで拍子感を養う
- 2拍子・3拍子・4拍子の拍子感を養い、表現できる

#### 〈活動例〉

##### ・音程（音の長さ）の認識

- a. ステップで歩幅の大きさを認識する
- b. 積み木の大きさを目で見えて認識する
- c. フープの大きさを認識し、実際にステップして認識する

##### ・色の認識

- a. 色の名称で2拍子・3拍子の認識
- b. 人数数で色の認識
- c. 2人組で手合わせ 顔の前に自分で手拍子、そのあと友だちと手を合わせる
- d. 友だちを背負って行っていく
- e. 拍子の友だちを見て歩いてその拍子が聞いたらその友だちを振り手合せをする

##### ・フレーズの認識

言葉をフレーズを感じ取り、フレーズに歩いて出来る

#### 〈3〉旋律のねらい

- メロディーを模倣できる
  - ドレミファソを数えて歌うことができる
  - 言葉をハンドサインで表現できる
  - いろいろをメロディーを聞き取りたえるようになる
  - 曲のなかで心算ができる
- #### 〈活動例〉
- メロディーの模倣（聞いてまねる）
  - ハンドサインで音の高低を表現
  - 図や動画で音楽のイメージづくり
  - ステップコート、レガートなどのミュージックを音に合わせて動き認識する内容
  - 側音から高音に上がるにしたがってタコタコ

ェンド、真顔から顔首の下がるいしたがって  
ディレクションなどの表情の変化をつける  
内容

#### 〔4〕動きのねらい

- ・いもいもな動き（歩く・止まる・はびく・揺れるなど）を体験する
- ・手足の動きを上手にコントロールできるようにする
- ・合図を聴いて止められた動きができるようになる
- ・音の強弱、高低、速い・遅いを感じ取り表現できる
- ・テンパやニュアンスの表現に対応して表現できる
- ・空間認識能力を養う
- ・すぐに判断して行動できるようにする
- ・経験例）
  - ・動物や乗り物などの特徴を知り自由に表現する
  - ・高音が聞こえたら両手を伸ばし、低音が聞こえたら身を低くする
  - ・2人組で両手をつなぎ、音に合わせてぐんぐん大きく小さくしたり小さく大きくする
  - ・ドリミファソの音階を空間を画して表現する
  - ・曲が止まれば動きを止める

#### 〔5〕運動と表現の関係性

幼児期の子どもたちは幼稚園という集団（小さな社会）という環境の中で、他者と関わるためにはあらゆる表現で自分を伝えなければ関係性は成り立たない。いかに自己表現をし、いかに相手の思いを受け止めることができるかを学ぶ時期でもある。

人間は自分が嬉しいと思えることに対しては自動的に取り組み、抑して他者に認めてもらうことにより、さらに自信が付き嬉しいという感覚が生まれる。そのような自己肯定感が豊かな自己表現へとつながるのである。

#### ＜子どもの動き事例＞

映像で遊ぶ子どもたちの様子を見てみると、山を作り、トンネルを作り、道を作って遊ぶ場面では水を通してみようという発想が生まれ

る。そこで水道からの水を選んでみるようになる。水道までは距離があるため、水を水を選んでくるのかという会話をやり取りが始まる。そしてどのようにして水を運ぶのかが議論される。割り合いをつけ配行、一人がバケツを持って行きバケツいっぱい水を運んで運ぼうとする。運くて一人では持てないことに気づき、友だちを呼びに行く。今度2人で運ぶやりややりとこぼれ跡場について時には水が半分になるといった体験をする。そこで次はどのくらいの水の量を取れば良いか、どのような歩き方（運び）であれば良いかなど、陸軍の良い水の運び方を習得していくのである。その間、砂場にいた友だちからは水を運んできたことに感服の言葉をもらい、みんなで水を流し遊びが始まり、達成感を味わい心が満たされるのである。

このような日常生活の場面や遊びの体験を通した経験の中で、子どもたちは思考力を動かす、知恵を出し、表現の幅を広げて行く。やえに経験値がつかない子どもほど表現に思いつきといえるだろう。そこで、保護者として子どもたちをどのように理解しているかが問われる。子どもを理解するためには、子どもの表現を早にどのように受け止めるかだけでなく、子どもがどのような目的・目的意識の中で表現しているか、自分の考えや気持ちなどをどの程度、具体的に表現できる能力を育てているかという発想理解の上で受けてその表現を受け止め、それに呼するフィードバックを行うことが保護者に求められる。

### V. 教育実践事例と「質問・能力」のちの性質との関連性

園における毎朝のルーティン活動において、3歳児からは言語の理解と言語的な回答を促し、4～5歳児からは自分で考えて表現する面白さを感じている事が観察される。発明活動において、3歳児は言葉表現がより豊かになるが、4歳児では表現の内容から探求心を持って取り組む姿、真ん中で体をコントロールしよ

りとする際、な表現においてはリーダシップをとる側、保持りや継続を促ししようとする側が見られる。表現遊びの際にも互表現で必要を促し合ふ、互表現では他人の表現に反応する側、互表現で多様な表現に反応したり、みんなで同期して表現する側しを導かう側が見られる。

園の教育行事で見えるリトミック的表現においては、単にリトミック的な時間があるだけではなく、自然なうちに表現できた達成感、自分が想像したものを表現できた満足感を味わう側、みんなで一つにまとまった表現やリズムやテンポを同期した表現を行う中で、協調することの楽しさを感じる側を重視することができる。

以上のような幼児の姿から、これらの活動が想像力を体質を育て、感じたり、気づいたり、わかったり、できるようになりたりする「知識及び技能の基礎」、気づいたことや、できるようにになったことなどを使い、考えたり、工夫したり、表現したりする「思考力・判断力・表現力等の基礎」、好奇心、達成感、意欲が育つ中で、よりよい生活を送ろうとする「学びに向かう力、人間性等」の資質、能力の3つの柱と深く関連している活動であると言える。

## Ⅱ. 考察

音楽は人間にとって最も自然な表現方法であり、リトミックの活動には「音楽」と「動き」が常に関連している。動きには必ず音楽的要素があり、音楽には必ず動くための意味が隠れている。テンポ、強弱、リズムなどの音楽要素は、そのまま動きの要素にもなる。ゆっくり動いたり、力強く動いたり、決められたリズムを正確に動いたりすることはそのまま音楽の要素である。「音」「動き」を要素として表現することがリトミックであり、リトミックにおける表現は自由ということが基本である。すなわち、自分の感じたままに、聞こえたままに動きを表現すること、友だちも同じ動きではなく、自分の思いで例証を十分に動かして表現することが重要であり、それが自己表現へとつながっていく。リトミックは子ども

にとっては「新しい遊び」であり、子どものための表現や様々な活動を引き出す機会を持っている。また、一人ではなく友だちとみんなで一緒にすることに価値があり、人と人とのコミュニケーションこそが表現の根本である。リトミックでは自発性を重視したり、ボートを漕いでめたり、宇通艇街までも行けるといった子どもたちの想像力を膨らませ、思い思いに表現している子どもたちの表情を鑑みる気持もまたその空間に入り込んでいることが分かる。

リトミックには音楽的要素にとどまらず、様々な分野のねらいが含まれている。五感（主に視覚・聴覚・触覚）を刺激した「動き」、力（筋力・骨格力・膨張力・表現力・想像力など）の発達に促した「動き」、知覚（達成感・達成感・満足感など）を促した「動き」、心（好奇心・向上心・関心・関心・自信心など）の成長を促した「動き」、感情（感受性・協調性・積極性など）を生み出す「動き」などである。集中力、想像力、創造力、判断力、思考力などの情緒感情のほらんじは幼少期に形成されていくため、子どもの成長はすべての領域の相互作用によって成り立つため、リトミックは幼児の人格形成の基礎をベースの優れた成長へと導くことができる。

## Ⅲ. まとめ

幼児期の子どもの姿を取り巻く近年の環境は、様々なものの可能性は高くなった反面、幼児期に必要な経験の場の不足がもたなり、子どもの育ちにとっては高い環境であるとは言い難い。女性の社会進出も促進され、家庭環境の質しさを認識することも多い。

育みたい遊びたいという親望は、もっと遊びたいという興味関心を引き出し、さらに楽しいことにチャレンジし挑戦しようになる喜びに導き、その喜びで子どもたちは目を輝かせるのである。特に自分の経験において、身体で経験したものの、心が動かされたことは記憶に残り、その後の生活で輝いてくるものである。子どもが習慣を形成しようという意欲がなくなり、知識を生み出すことを習得、工夫をするということが減少している今、様々なものに興味関心

を得る。鑑別したり評価したりできるような開始作りや導きが大前提である。そして子ども一人ひとりの育ちに寄与しているから、無助の可能性を弁別するためには「自力で問題の解決法を見つけ出して行動できる能力」を児童発達サポーターという音楽教育法は子どもたちの人間形成の土台作りに関連な教育の一つなのである。

## 参考文献

文部科学省「幼稚園教育要領解説」アレー・ムス館、2018。

中村礼香「表現活動を通して育まれる表現・能力―音楽表現活動に焦点をあてて―」高尾島女子短期大学紀要第 54 号 69-73 (2008)

メル・ホル・ジョアン・ダムタローズ『リズムと音楽と教育』(監訳平田静、山本昌男訳) 南日本音楽出版 2003

(2009 年 3 月 29 日受領)